



號 月 正



第二卷 第一號

目次

年改まる	別所梅之助	(一)
禁苑の春	石田幹之助	(二)
古寫本の興味	永見徳太郎	(四)
ジュウル・ロマンと「善意の人々」	高見裕二	(六)
マキアヴェルリとの一騎打	多賀善彦	(二)
日本の科學	菊池正士	(四)
晩秋の鐘	小竹無二雄	(六)
丸本のことなど	豊竹古靱太夫	(八)
嘉村礒多の倫理と郷土	松村泰太郎	(二六)
ブッケ・レヴェー		
文學の宿命	平岡昇	(三)
バルザック	水野亮	(四)
良書推薦	諸家	(三)
後記		(二)



丸本のことなど

豊竹古鞆太夫

此秋の始めに松竹宣傳部の中村氏と創元社の加藤氏とがわざと粉濱の拙宅に見へて 何か古本に對しての話をせよとの事 私は無學で何事もわからずことに筆もまわらぬ者故御赦しを願ひ度しと御わびを申ししたが 何んでもいいからしやべれといはれるのでそんなら自分のおもつた事をいふて見ませふとて御話をした

私は稚い時から人様に本をいただいても其本に第五と番號がある時は直に一二三四を揃へないと氣のすまぬと申辭がありました

阪へ義太夫淨瑠璃の修行にやつて來ました 其頃から自分の業とする義太夫の丸本をぼち／＼と集める事を樂しみにやりかけましたが其時代は一冊が古本で五錢か六錢又は良き本で十錢も出せば求められたものです 其後一度東京へ歸へり又十六歳に阪地へ參りましてまた／＼丸本をためだしましたが十八九歳に成りまして小遣がなくなると折角ためた丸本を賣り飛ばして仕舞ふ しかし又買へばいつでもあると申す氣が有りました 本も澤山に古本屋に積重ねて有つてまだ／＼安くかへました 買つては賣 うつては買と申様な事を何度となく致しました 夫

れが明治末期には丸本をどし／＼買求める學校や學者の方々が澤山に出來て追々と本がなくなりかけて來ましたのに氣が付き是はいけない自分は何物もわからぬがせて業とする物に關した書物は今の内にさがし出して出来るだけ手元へ殘しておきたいと考へたが 義太夫道の文獻と申物はすくないと申事を先輩からよく聞いておりましたからまづ人形芝居の古番附をよりよりに集めかけましたが是が中々よりません 漸々と一番古い所で享保十八年七月から元文 延享 寶曆 明和 安永 天明 寛政 享和と引續き手に入りましたが 此時代の番附が全部揃ふと申事は出來ませんが竹本座初代政太夫時代 又豊竹座越前少様(東之元祖)時代 書御し外題の二枚番附なども澤山有ります 其後文化 文政 天保間の分も大方揃ふ位になりました 夫から弘化 嘉永を始め安政 萬延 文久 元治 慶應の

時代のは大方揃ひ 明治 大正昭和の今

日に至る迄の分は各芝居の部は揃ふて有

ります 枚數で三千四百枚になつて參

りました 他に人形淨瑠璃に關した錦繪

とか人氣顔附大番附なり又其時代の種々

の物に引當て評判した一枚刷とか申す様

な物迄數多集めて居ります 大昔のボス

ターなどに中々面白い物が有ります 實

に義太夫道に關した文獻と申す物は前に

も申しましたがほんとに少數より出ていな

いものと見え評判記なども中々手に入り

かねまして茲廿ヶ年許りの間に

今昔操年代記 享保十二年刊

猿 口 嚮 延享二年刊

浪華其未葉 延享四年刊

操曲浪花の芦 延享九年刊

京大阪操西東見臺 寶曆七年刊

女大名東西評林 寶曆八年刊

新評判蛙歌 寶曆十二年刊

評判花相撲 寶曆十三年刊

評判角茅芦 寶曆十四年刊

評判三國志 明和三年刊

評判鶯宿梅 安永十年刊

操評判闇之礫 安永十年刊

淨瑠璃秘傳抄興評判記有 天明二年刊

江戸版今昔操年代記 寛政八年刊

浪のうねり鼎嚮 年號不明

此十五冊より手にはいりません かうい

ふ評判記を見ますと其時代の太夫方の

語り口も外の事もわかる事が有ります

又其他 鸚鵡ヶ袖やら加賀様の大竹集

竹子集 新小竹集 翁竹 瑠璃不記及び

義太夫に關した種々の物が貳百種以上た

まりました 夫れから丸本ですが前に申

しました通り何度となく賣り拂つたりし

たあげくに是はと氣の附いた時分には本

の御値段が無茶苦茶にお高くなつて中々

元のように一冊を五錢や十錢では賣つて

くれぬ時代になりましたが夫れでも今か

ら求めて置かぬと一年々々と丸本が此世

から消へて行くと思ふて集め出し 只今

で近松作と各先生方の推定ある物迄を入

れ 外に同翁作の外題異本を合せ百四十

冊 又紀ノ海音作卅一冊 其他の作者の

出せし物四百七十二冊 右の内には錦文

流作の虎ヶ石とか男色加茂侍などもあり

又會根崎心中後日遊女誠草やら梅屋瀧

浮名之色揚 傾城買指南 富貴貴我 心

中戀之中通 種彦作の勢田の橋龍女の本

地 其外版下本で隅田川續傳 新版繪本

浪花詠 天一坊實記 契情天の羽衣 邯

鄲曲輪短夜之夢と申す外題では是から版本

に致す本など珍らしいのが有ります 夫

れに今昔妹背之腹帯と申す宮園節の丸本

があります たいがい宮園の本は一段

本が多いのですが五段物の丸本があるの

は珍らしい物と思ひました 又長枕褥合

戰などと申す珍本も有ります 他には山

本角太夫節は京都の後に土佐様の本

江戸虎屋土佐少椽は江戸土佐節の本

又薩摩外記節 岡本文彌節 伊藤出羽椽

説經節ら百冊以上になつております

此外にも十年許り前から古淨瑠璃 金平本とか六段本とか申す畫入の本を集めかけましたが是が又澤山出ません 出ましたらば實に馬鹿らしい高い値段 古本の骨董扱です かういつた畫入本なども安く澤山にごろ／＼してゐた時代がありました、そんな頃にはこんな物はいらぬなどと申しておりますがおしい事をしました

其頃から集めていけば珍らしい物が澤山にありました 此頃は中々出ませんが是は萬治 寛文 延寶頃の物ばかりで慶長 元和 寛永 正保 慶安 承應 明暦時代の畫入本がまだ一冊も手にはいりません 私は若い時分によく夜店を歩きました ふと丸本が目になりまして其外題が自分の持つていない物であつた

時 又は氣なしに求めて歸へつて目を通

して讀んで見て面白かつたりした時の其愉快さ嬉しさは何んともいへませんです

只今は不精者になり夜店どころか文樂へ勤めるだけで他家に許りおります

それでも東京へ年の内に一度なり二度なりを出ました時には淺草雷門の淺倉屋さを始め神田の一誠堂 巖松堂 大屋

田口 村口 本郷の木内や弘文莊などあ

さりに出がけます事が東京へ參ります時の樂しみで有ります 又何か珍らしい本

が手にはいりまして是を誰れにも手を附けさせず自分が整理を致すのも私の樂し

みの一つです 前にも申しました版下本の内隅田川續

佛と申す外題は歌舞伎でよくやります彼の法界坊の淨瑠璃で是は歌舞伎畑から義

太夫に書直した物で 此本は版本にならずに終つております 一般に知つて居る

者は有りますまいと思ひます 只時々人

形芝居では法界坊庵室と隅田川位が出て

おりますだけで全五段を通してやつた事はありませんから 夫れ故私共らも聞いた事はありません 今私の手元にある版

下本が残つてあるだけと思ひます 丸本になりまして物でも紛失したり焼けたり

して其版木が段々消えてないものが澤山にありますが 私が丸本を集めると申す事

は五行稽古本を拜見致ますとよく文章や文字の間違ひがある 夫れは丸本を見る

と成程やはり五行本が違つていたなと思ふ事がよく有りますから何でも丸本を調

べるに限ると思ふ所から集めかけた事です 私は何と申しても丸本通りに文章を

やつておれば間違ひはないと思ふて成るべく丸本に寄つて語る事にしております

勿論皇室に關した文字や種々の事は氣を付けて省略し又改めて語るようになして

おります 又或る時に珍らしい外題の物が即賣の目録に出ますと早速飛んでいて

其本屋に遇ひますと其本は今賣れましたと言はれた時程残念な事は有りません其本がひとしほ良き本の様な氣がして一日くしや／＼致します 又丸本を調べまして一人で嬉しくなる時が有ります それは鳥渡例を引いて見ますとよく皆さんが語つていられますので天網島時雨炬燵紙屋内之段 又は壽連理の松湊町之段や櫻鏝恨鮫鞘鰻谷之段 八百屋獻立新軛八百屋内之段 まだ他にも澤山有りますが此外題の物は丸本には有りませんので一段物で増補したものかと思ふておりましたが皆違つた外題の中にはいつて有りますが皆違つた外題の中にはいつて有ります物を少しく文章書きかへて此外題を附けて語り出したもので 先づ壽連理ノ松湊町は夏浴衣清十郎染と申す丸本の中に湊町の段があります 又時雨炬燵の紙屋内は置土産今織上布と申物の中に皆さんの語る紙屋の段が有りました 此丸本は曾根崎新地での出来事 彼の菊野殺し

五人斬と小春治兵衛を一つにまとめた淨瑠璃で其中の中の巻がそれである 尤も終りの所は少し文章違へども子供が尼になつて来て白無垢のちらし書を読む所もある 是を時雨炬燵と外題を替へて語り出せしが今日迄残つて結構な近松作の天網島紙屋内から大和屋の段が埋れて仕舞つたのであります 又お妻八郎兵衛鰻谷の段は櫻鏝と云ふ丸本はないのでして是は裾重浪花八文字と申す題の丸本六つ目が此頃語る鰻谷の段である 是は文章を替へてなく櫻鏝恨鮫鞘と外題を附けて語り出し それが其儘残つております 今一つはお千代半兵衛八百屋で是は江戸で出来た物で 尤も近松作の宵庚申として名高い物も有りますが江戸の方は萬代會我と申す外題の物を前淨瑠璃とし後淨瑠璃に此お千代半兵衛とお夏清十郎 お半長右衛門 此三つの外題を一日替りに興行した時に出来たお千代半兵衛の中にあ

る物を萬代會我八百屋の獻立と申す外題を附けて語り出したのが後に三代目豊竹若大夫が此段を面白く語り 夫れから大いに流行したのですも又増補物がよろこばれて近松作の宵庚申が其儘になつてしまひました 尤も此段は猥褻で當今では語れない物ですから どなたも語られませんが堀江の五世彌太夫師の十八番物で實に結構に聞かして頂いた事が有りました こんな事で或外題の中にある物に新に表題を附て流行した物が澤山にありま

す 夫れを丸本を読んで見出した時は嬉しいものです 今後もどし／＼と藝太夫道に關した古本はもとより新しき洋紙の本も集めて残しておきたいと考へております こんなお話ならばまだ／＼ありますが餘り同じ事を長くありませんからもうやめておきませう (昭和十五年十一月)

* 太夫は大坂文樂座所屬

鳥羽正雄著 日本 <small>の</small> 城	價一・五〇
中谷宇吉郎著 日本 <small>の</small> 科學	價一・二〇
柳田國男著 妹 <small>の</small> 力	價二・六〇
谷崎潤一郎著 猫と庄造と	價一・六〇
アラン著 精神と情熱とに	價六・六〇
小林秀雄譯 關する八十一章	價一・四〇
西堀一三著 日本茶道史	價一・四〇
齋藤隆三著 近世相史概觀	價一・四〇
河竹繁俊著 河竹默阿彌	價一・六〇
ヴァレリイ著 詩について	價一・二〇
佐藤正彰譯 永仲基	價一・二〇
石濱純太郎著 西行研究錄	價一・〇〇
川田順著 續妻への手紙	價一・五〇
チエホフ著 續妻への手紙	價一・四〇
湯淺芳子譯 隆寺	價一・四〇
伊東忠太著 寺	價一・四〇
嘉村礪多著 秋立つまで	價一・七〇
△マキアヴェリ選集	價一・四〇

△アシア問題講座(保存版)	全十二卷 各冊價二・〇〇
△創元支那叢書	價一・三〇
胡適著 四十自述	價一・三〇
吉川幸次郎譯 綠々堂隨筆	價一・三〇
豐子愷著 瓜豆集	價一・六〇
周作人著 雷賣りの董仙人	價一・三〇
松枝茂夫譯 雷賣りの董仙人	價一・三〇
吳守禮譯 雷賣りの董仙人	價一・三〇
平岡武夫譯 古史辨自序	價一・五〇
△創元社版 橫光利一集	價一・五〇
時計 天使	價一・五〇
春園 考へる葦	價一・五〇
家族會議 短篇集	價一・五〇
△創元科學叢書	價一・五〇
ハイベルグ著 古代科學	價一・六〇
平田寬譯 物質の神秘	價一・八〇
石橋榮譯 物質の神秘	價一・四〇
△創元社作曲理論叢書	價一・三〇
小松清譯 近代和聲樂の說明と應用	價七・三三〇

月報「創元」第二卷第一號
 昭和十五年十二月二十日印刷
 昭和十六年一月一日發行
 東京市四谷區愛住町十九
 編輯兼 矢部良策
 發行人 植田庄助
 東京市芝區橋本町一ノ十三
 印刷人 植田庄助
 發行所 株式會社 創元社
 東京市四谷區愛住町十九
 振替東京一五六五番
 振替大阪五七〇九九番
 電話四谷八三八一番
 電話新町六六〇三番

○御送金は切手又は振替を御利用願ひます。
 ○代金引換の御註文は勝手乍ら御断り申します。
 定價 一部五錢(送料共)
 一ヶ年七十錢(送料共)